

四 單章。一事項を述べ、主語、説語、各一  
 つある説なり。  
 花 咲く。  
 春の 花 美しく 咲けり。  
 忠と 孝と は 人倫の 大道なり。  
 鳥は 啼き つか、 飛ぶ。

四 單章。一事項を述べ、主語、説語、各一

つ ある説なり。

花 咲く。

春の 花 美しく 咲けり。

四 合章。單章の構造にして、主語 或は  
説語 が二つ以上 合同し ある説なり。

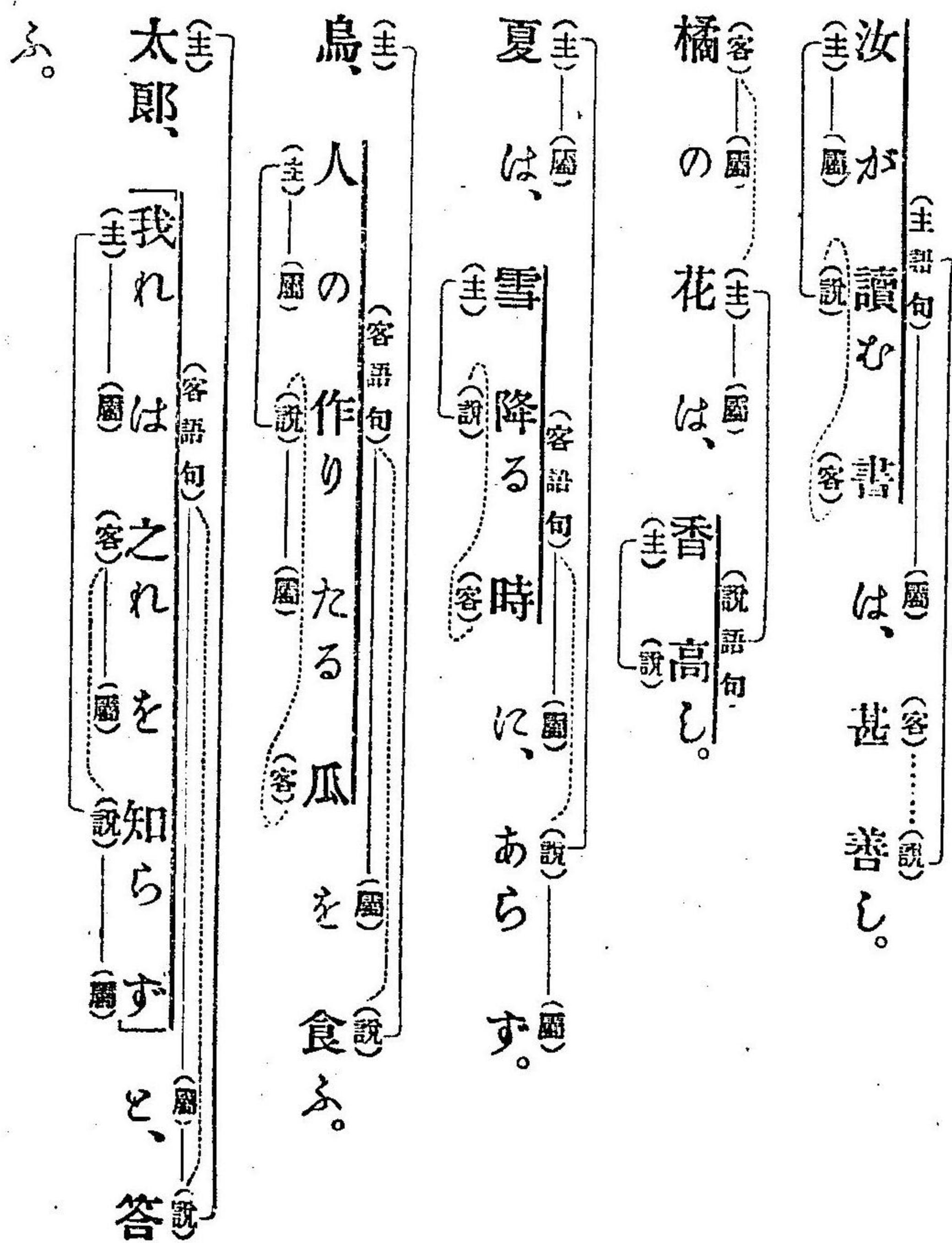
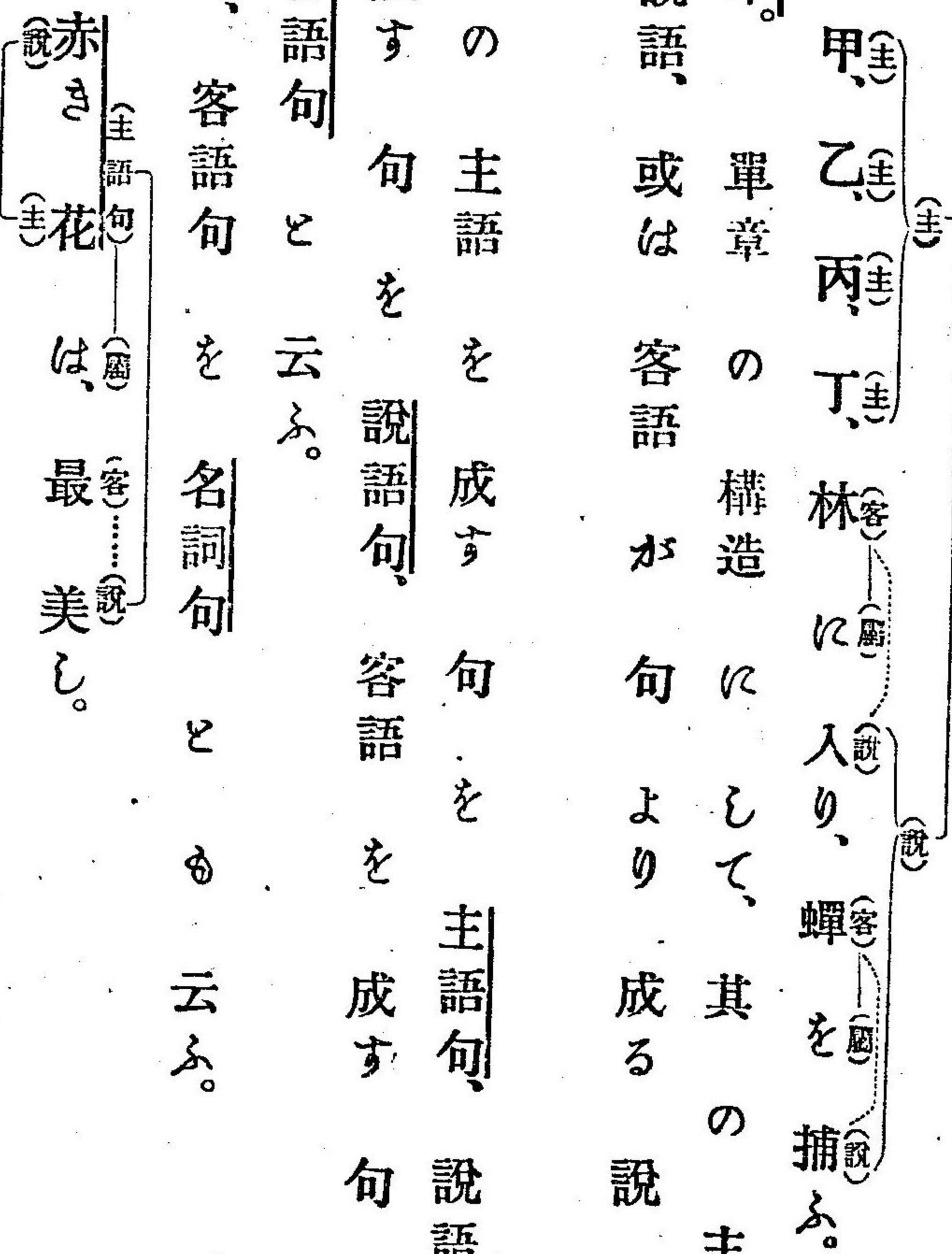
忠と 孝と は 人倫の 大道なり。

鳥は 啼き つか、 飛ぶ。

七 複章。

單章の構造にして、其の主語、説語、或は客語が句より成る説なり。

複章の主語を成す句を主語句、説語を成す句を説語句、客語を成す句を客語句と云ふ。主語句、客語句を名詞句とも云ふ。



八 連章。句を連接して、數事項を述べ、主語、説語二つ以上ある説なり。連章の句の連續方によりて、本句、副句、反句の別あり。

雨(主)降り、(説)風(主)吹き、(説)て、(問)日(主)暮る。(説)  
(對句) (本句)

彼(主)れ退(説)かば、(問)我(主)れも退(説)かむ。(屬)  
(副句) (本句)

春(主)は來(説)れども、(問)花(主)咲かす。(屬)  
(反句) (本句)

春(主)來(説)る毎(問)に、(副句)花(主)咲く。(本句)

九 雜章。合章、複章、連章等の種々相雜りたる説を雜章と云ふ。

正成(主)、義貞(主)は、(屬)共に(客)南朝(客)に奉勤せ(説)

し忠臣(主)に(屬)アリて、(問)正成(主)は、(屬)湊川(客)

に戦死し、(屬)義貞(主)は、(屬)藤島(客)に戦死し(説)

たり(屬)。

設問 説とは何ぞ。體によりて、説を分て。各體の例を示せ。説を構成する語部の種類

を云へ。各語部の例を示せ。説の要部とは何ぞ。構造によりて、説を大別せよ。章句の例を示せ。章を細別せよ。各章の例を示せ。句を細別せよ。各句の例を示せ。

第二項、作説法。

㊦ 説を作る法を、措語法、係結法、引用法、省略法、施點法の五項に分ちて、述べし。

第一、措語法。

㊧ 説に於ける主語、説語、客語、屬語、間

投語の位置は左の如くなるべし。

㊨ 主語は上に、説語は下にあるべし。

花<sup>(主)</sup> 咲く。

但、名詞句の或るものに於いては、説語が連體法にありて、主語の上にあるべし。

赤<sup>(主)</sup>き花<sup>(客)</sup>は、美し。

人<sup>(客)</sup> 散<sup>(主)</sup>る花<sup>(客)</sup>を、惜む。

㊩ 客語は其の副ふべき主語、説語、客

語の上にあるべし。

春(客)の花(主)は秋(客)の紅葉(客)より更(客)に美(説)し。

但、主語句、客語句の或るものに於いては、説語に副ふ客語が、其の下にあるべし。

我(主語句)が(説)出立(説)せし日は、好天氣なり  
我(客語句)れは、汝(客語句)が(説)持(説)つ書(客)を、欲(客)しく思(客)ふ。

四 説語に客語數多副ふ時は、時刻は場所より上に、場所は人、事物より上に、又名詞、代名詞の副用格は其の受用格より上にあるべし。

我(客)れ今日(客)、學校(客)にて友人(客)と球(客)を打(説)ちたり。

五 名詞句に説語客語數多ある時は、客語は動詞の上に、動詞は形容詞の上にあるべし。

籠(客)の、二羽(客)の、よく囀(説)づる、美(説)しき鳥(主)

あり。

四 屬語は其の附くべき主語、説語、客語、屬語の下にあるべし。

我れは此の書を讀むべきなり。

五 間投語は各語の性質によりて、語の上、語の下、語と語との間等にありべし。

あゝ、我れは之れを如何にせむ。  
人は月と花とを愛す。  
彼れは、けにいみじき位に上りける者かな。

四 或る語を強め、又は説の口調を滑かにせむが爲に、以上の規則をわざと犯すことあり。

既に咲きぬ、此の花は。

宛名より、我が名の字大なり。  
いともし美しき、二羽の鳥あり。

第二、係結法。

四 用言にて章の終を結ぶに、其の章中に用ひたる後置詞の種類に随ひて異同あり。此の後置詞を係り

と云ひ、用言を結びと云ふ。係結の種類を三種となす。

三 第一種係結。之れは通常の場合にして、結び断止法なり。係りは、第二種第三種の係りの外、如何なる後置詞あるも、妨げなし。

桃も、櫻も、咲けり。  
夜は、暗く、道は、悪し。

三 第二種係結。之れは、結びは連體法にして、係りは、列なむ、(強抑)や、か、(疑問)なり。之れには第一種の係り混入す

ることを得。

梅も、櫻も、早きぞ、善き。  
月ぞ、冴けき。斯くぞ、ある。  
人丸は、歌の聖になむありけ

我れは、幽霊をなむ見し。  
讀までや、あるべき。  
恨みや、すらむ。何かある。  
誰れか、然は、云ひたる。

四 第三種係結。之れは、已然法の結びにして、こそ(殊別、強抑)の係りなり。之れ

に 第一種の 係り 混入する ことを 得。

さ こそ は あり けめ。

花 こそ 咲き げれ。

いと こそ 尊 げれ。

時に、しも (強抑 と 詠歎 と) が 此の 係り と なる こと あり。

君 しも あれ。 時 しも あれ。

四 同じき 章 の 中 に、第二種係 の 連出、 第三種係 の 連出、 第二種係 と 第三種係 と の 混出 を 許さ ず。

六 歌 に は、間々 名詞 にて 結ぶ こと あ

る べし。

うき 身 ぞ 今 は 瀬々 の 埋木。  
汝れ こそ は 岩 守る あるじ。

第三、引用法。

二 他人 の 説 を 引用する に 三種 あり。

直接引用法、 間接引用法、 旨意引用法 是れ なり。

三 直接引用法 は 他人 の 説 を 其のまゝ 引用する 法 にして、名詞句 と 見成して、と (副用格詞)、など (總括 の 後置詞 にして、下に 副用格詞 とを 省く こと 多し) にて 受くる もの なり。





彈正 ちつども さわがす、……かゝる  
 御心のつき給ふこと 是れ たゞ事  
 にあらず。一定 古狐の 入替つた  
 るにぞ候はむ。 賤しき 者の  
 諺に「人 取らむと する 鼈は  
 必 人に 取らる。」と 此の  
 御事にて 候ふぞ。」と 憚る 所な  
 く 申し けれは……。  
 歌の 詞書さにも、「花見に 罷れ  
 り けるに、早く 散り過ぎに けれ  
 は。」と ども、「さはる こと ありて、 罷

らで。」など(と)も 書けるは「花  
 を見て。」と 云へるに、劣れる  
 ことかは。

目 間接引用法は 他人の 説に 多少 我  
 が 口氣を 混じたる 法にして、 名詞句  
 と 見成して、と なるにて 受くる こと  
 直接引用法に 異ならず。

重成も 讚岐まで 御供仕るべかり  
 しを、固く 辭し申して 罷り歸れば、  
 「汝が此の程 情ありつるに、  
 即 罷り留れば、今日より 彌 御心細

くこそ 思し召せ。光弘法師 未 在ら  
 ば、事の由を申して、「追て 参る  
 べし」と申せ。返すく 此の程の  
 情こそ 忘れ難く 思し召せ。」と 御説  
 ありけるこそ 忝けれ。  
 院に成らせ 給ひて 御目を御  
 覽せ ざりしこそ いと いみじかり  
 しか。一品の宮を 殊の外に  
 かなしうし 奉らせ 給ひて、御ぐし  
 のいと をかしげに おはしますを  
 さぐり 申させ 給ひて は、「うつくし

う 御はする 御ぐし を 得見奉らぬ  
 こそ、心うく 口をしけれ。」とて、ほろ  
 くくと 泣かせ 給ひけるこそ あは  
 れに 侍れ。

四 旨意引用法 は 他人の説の旨意を

採りて、作者の説に言ひ成す法に  
 して、事由、旨趣などの名詞にて終  
 る名詞句と成るものなり。

宣房の中納言 御使にて 東へ下  
 る。  
 此の事 更に 御門の 知ろし召さ

ぬ。由。など、けざやかに云ひなす。  
 毛利の人々相議り、秀吉の許に  
 使して、長く兩家の好を結ぶ  
 べき由を、云ひ送ること、度々に  
 及ぶ。  
 御門、速に賊を平けむことを、  
 仰せ下さる。

第四、省略法。

曰 説にて、有るべき語をわざと省く  
 ことあり。之れは同じ語を度々用  
 ふることの煩はしきを避くるなり。

三 名詞 代名詞 (主語、客語) を省くもの。

之れは國文に最多き例にして、之  
 れが爲に初學者は自他の誤などを  
 爲すこと多ければ注意すべきこと  
 なり。之れに全略、中略の二法あり。

(甲) 名詞、代名詞の全略。

雅房の大納言は才かしこく、よき  
 人にて、(院) 大將にも爲さば  
 やと、れほしける頃、院の近習  
 なる人、(只今) (臣) あさましき事を  
 見侍りつ。と申されければ、(院)

「其は」何事ぞ。」と問はせ給ひけるに、(近習)「雅房卿、鷹に飼はむとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、(臣)中垣の穴より見侍りつ。」と申されけるに、(院)うとましく、にくく思召して、日頃の御氣色もたがひ、雅房卿昇進もし給はざりけり。

我が父の、(之れを)聞き給ひて、「其の許の)志のほど忘るべからず。息男いとけなき者にあらす。

我れ如何にとも定め難し。彼れと(之れを)相計り給ふべし。と答へ給ひ、其のあけの日、我れ(父)の許に参りしに、(父)かくと(我)れに仰せられたり。

(乙) 名詞、代名詞の中略。副ふべき客語

若しくは、連體法にて云ひかけたる説語のみありて、其の下の名詞、代名詞を省きたるもの。

身。を。傷。る。(事)より、心。を。痛。ま。し。む。る。(事)は人を害ふこと甚し。

瞿麥<sup>○</sup>は、唐<sup>○</sup>の<sup>○</sup>（瞿麥）は更なり。大<sup>○</sup>  
 和<sup>○</sup>の<sup>○</sup>（瞿麥）もいとめでたし。  
 梅<sup>○</sup>は白<sup>○</sup>き<sup>○</sup>（梅）も、赤<sup>○</sup>き<sup>○</sup>（梅）も皆  
 をかし。

目 動詞、形容詞、助動詞（説語、屬語）を省く  
 もの。

之れにも全略、中略の二法あり。  
 (甲) 動詞、形容詞、助動詞の全略。

度々の過ちに、「今日こそ（勝ため）  
 と、思へど、かひなかるべし。  
 集は古萬葉集、古今、後撰（いとめでたし）。

(乙) 動詞、形容詞、助動詞の中略。副ふべ

き客語、或は、連體法にて云ひかけたる  
 説語のみありて、其の下の動詞、  
 形容詞、助動詞を省きたるもの。

花は盛<sup>○</sup>り<sup>○</sup>に<sup>○</sup>（あり）、て、月は隈な  
 し。

横濱は東京に<sup>○</sup>（近し）神戸は大坂  
 に<sup>○</sup>近<sup>○</sup>し<sup>○</sup>。

天皇孔舍衛坂にて兵を隨へ<sup>○</sup>（給ひき）、  
 白肩津に<sup>○</sup>至<sup>○</sup>り<sup>○</sup>（給ひき）、長髓彦を討た  
 ひとて、始めて河内國に入り給ひ

き。△  
 雨 降り（るなるべし） 風 吹く なる△ べ△  
 今 は 昔、竹取 の 翁 と 云ふ 者  
 有り けり△  
（本過去） 竹 なむ 一 筋 あり 竹 の 中 に もと  
 光る 竹 なむ 一 筋 あり 竹 の 中 に もと  
 しがり で、寄りて、見る に、筒（本過去） の  
 中 光り たり。△  
（けり） それ を 見れ ば、  
 三寸 ばかり なる 人、いと 美しう て  
 居 たり。△  
（けり） 手 に うち入れ て、家  
 へ もち て 来 ぬ。△  
（けり） 妻 の 女  
 に あづけて 養は す。△  
（けり） うつくしき

三 點

は 説 に 於ける 語 の 斷續 を 示

第五、施點法。

事 かぎりなし。△  
（けり） いと をさなけれ  
 は、籠 に 入れ て 養ふ。△  
（けり） ……かくて、  
 翁 やうく 豊に なりゆく。△  
（けり） 此 の  
 ちを 養ふ はさ に、すぐくと 大きに  
 成りまざる。△  
（けり） ……翁 心地 悪しく、苦し  
 き 時 も、此 の 子 を 見れ ば、苦  
 しき 事 も やみ ぬ。△  
（けり） はらたしき  
 事 も なく 慰み けり。△  
（本過去） 翁 竹 を  
 取る 事 久しく 成り、榮え けり。△  
（本過去）

す符にして、句點、章點、引用點の三種あり。

目 句點、之れは左の場合に施すべし。

(ア) 句と句との間。

雨降り、風吹きて、日暮る。

彼れ(對句)退かば、我れも(本句)退かむ。

春は(副句)來れども、花(本句)咲かず。

春來る(反句)毎に、花(本句)咲く。

美しく(副句)咲く花は、(本句)價貴し。

(イ) 句と語との間。

人(主)散る花を(客語句)惜む。(説)

香(主)高き花は、(客語句)最よし。(説)

橘の花は、(主)香高し。(説語句)

春は、(主)花咲く時なり。(説)

「なり」は「に、あり」の約なれば句點も省かりたり。

彼れは、(客語句)「我れ之れを知らず。」と、答ふ。

(ウ) 同じき關係にて相並びたる語の間。



但 名詞、代名詞の間に 接續詞 ある  
時、及 格を 異に する 時は 點な  
し。

甲<sup>(主)</sup> 及<sup>(接)</sup> 乙<sup>(主)</sup> 丙<sup>(主)</sup> 丁<sup>(主)</sup> 此處<sup>(客)</sup> に<sup>(接)</sup> 來<sup>(説)</sup> て、

遊<sup>(説)</sup> べ<sup>(接)</sup> り。 我<sup>(主)</sup> れ<sup>(客)</sup> 友<sup>(副用、客)</sup> 人<sup>(客)</sup> と 球<sup>(受用、客)</sup> を 打<sup>(説)</sup> つ。

雨 屢<sup>(客)</sup> い<sup>(客)</sup> と 強<sup>(客)</sup> く 降<sup>(説)</sup> る。

此 の 石 は 堅<sup>(説)</sup> く、 白<sup>(説)</sup> く、 美<sup>(説)</sup> し。

我<sup>(主)</sup> れ<sup>(客)</sup> 石 を 堅<sup>(客)</sup> く 握<sup>(説)</sup> り て、 離<sup>(説)</sup> さ ず。

茲<sup>(主)</sup> に<sup>(接)</sup> 甲<sup>(主)</sup> と<sup>(接)</sup> 乙<sup>(主)</sup> と<sup>(接)</sup> 丙<sup>(主)</sup> と<sup>(接)</sup> 丁<sup>(主)</sup> と<sup>(接)</sup> あり。

春 の 日 は 暖<sup>(客)</sup> に<sup>(説)</sup> (あり) て、 長<sup>(説)</sup> し。  
章 點 ○ 之<sup>(客)</sup> れ は 章 の 終<sup>(客)</sup> り に 施<sup>(説)</sup> す  
べし。

人 は 動物 なり。

夏 は 暑<sup>(客)</sup> く、 冬 は 寒<sup>(客)</sup> し。

四 引用點「」之<sup>(客)</sup> れ は、 直<sup>(客)</sup> 接<sup>(客)</sup> 引用 及<sup>(接)</sup> び 間<sup>(客)</sup> 接<sup>(客)</sup> 引  
用 の 説 を 包<sup>(客)</sup> む 爲<sup>(客)</sup> に、 施<sup>(説)</sup> す。

三 の 宮 を 次<sup>(客)</sup> 第<sup>(客)</sup> の ま<sup>(客)</sup> へ に と、  
思<sup>(客)</sup> さ れ け<sup>(客)</sup> る に、 法<sup>(客)</sup> 皇<sup>(客)</sup> を い<sup>(客)</sup> と い<sup>(客)</sup> た  
う 嫌<sup>(客)</sup> ひ 奉<sup>(客)</sup> り て、 泣<sup>(客)</sup> き 給<sup>(客)</sup> ひ け<sup>(客)</sup> れ ば、「あ  
な ゐ<sup>(客)</sup> づ か<sup>(客)</sup> し。」 と て、 る て、 は な<sup>(客)</sup> ち 給

と ひて、「四の宮こゝにいます。」

**設問** 主語、説語の位置如何。名詞句に於ける主語、説語の位置如何。客語の位置如何。名詞句に於ける説語、客語の位置如何。属語の位置は。間投語は。係りとは何ぞ。結びとは。第一種係結とは。第二種係結とは。第三種係結とは。引用法の種類を問ふ。各種の例を示せ。名詞、代名詞の全畧の例を示せ。其の中略の例を示せ。動詞、形容詞、助動詞の全略の例。其の中略の例。點の種類を云へ。句點を施す場合を挙げよ。章點、引用點を施す場合を云へ。

日本小語典終。

日本小語典附

定價金五拾錢

明治三十三年一月四日印刷  
明治三十三年一月八日發行

著者 杉敏介

東京市本郷區眞砂町十三番地

發行者 山縣悌三郎

東京府下北豐島郡東鴨町大字上駒込十八、十九番地

印刷者 中西美重藏

東京市麴町區内幸町一丁目五番地

印刷所 シヤパン、タイムス社

東京市麴町區内幸町一丁目五番地

東京市神田區南甲賀町八番地

發行所 内外出版協會

大阪市東區南久寶寺町四丁目拾九番地

關西大賣捌所 前川善兵衛

文部省 簡野道明 纂編

# 初等漢文讀本

全四冊

定價 一卷金拾五錢 二卷金拾五錢 三卷金拾五錢 四卷金拾五錢 郵稅六錢

本書は、漢文科初學入門の書に充てんが爲めに編纂せり。材料の選擇は、大抵文部省の漢文科教科細目に準據したれども、更に廣くこの學科擔任諸氏が實驗上の考案をも斟酌し、編者が意を以て取捨したる點少しとなさず。即ちこの書の編纂にあたり、最も意を致したるは、左の數項に在りとす。

- 一、會話作文に必要なる字句、并に慣用の故事熟語を網羅し、國語國文の助たらしむること。
- 一、國語との聯絡を保たしめんが爲めに、多く常山紀談、駿臺雜話等の國文を漢譯せし文章を採録し、以て翻閱對照の便をはかりしこと。
- 一、詩賦は實に文章の精巧なるものにして國文の資料となり、淵源をなれるもの亦少しとせず。此の書三四の卷に間々人口に膾炙せる詩賦を挿入せしは、これが爲めなり。
- 一、卷首に於て句例の一斑を掲げたるは、これによりて漢文講讀の素地を作らしめんが爲めなり。その短句のみに限り、回點多き長句を省きたるは、難易の程度を計りてかく爲したるなり。
- 一、生徒の初めて漢文を讀む、其の困難、洵に想ふべきなり。故に此の書一二の卷に收めたる文章は、主として生徒が小學に在りて、既に學習せし字句と事實とに由りて成れるものを採録せしは、これによりて其困難を軽減し、容易に漢文の讀方を悟了せしめんが爲めなり。

發行所 東京市神田區南甲賀町八番地  
內外出版協會

第三高等學校 教授 纂編 文士 林森太郎

# 國語讀本

定價 一卷四錢 二卷四錢 三卷四錢 四卷四錢 各冊金拾五錢 郵稅六錢

國語科の要旨は、國民をして、一國の國語は、外にしては一民族たることを證し、内にしては同胞一體の公義感情を固結せしむるものなるを以て、其消長は直ちに國家の盛衰に影響し、其獨立に密着の關係あるを知らしむるにありとす。而して中等教育程度にありては、先づ生徒をして、中古時代以降の文章を理解し得べき力を具へしめ、併せて國文を以て己が思想感情を自在に發表することを得しむるを企圖すべきなり。

本書は、文部省の中學校教科細目に據りて編纂したるものにして、専ら明治時代徳川時代の文章より、普通文の模範たるべきものと、或は、他日學ぶべき中近古文の階梯たるべきものを選択して、通編四卷とし、讀書力を養ふと同時に高雅なる文學上の趣味を解せしめ、百科の學術に關する知識を啓發し、兼ねて徳性を涵養することに就きて最も力を盡したり。蓋し新古國文の採擇皆其當を得たるは論なし、順序、聯絡、難易の配置等、其宜しきを得たること、同種の讀本中、恐らくは此右に出づるものなからん。

發行所 東京市神田區南甲賀町八番地  
內外出版協會

文 部 省 檢

山 口 高 等 學 校 教 授

文 學 士 佐 々 政 一 著

# 日本文學史要

(定價 金 拾 五 錢 郵 稅 金 六 錢)

一此書日本文學の起原發達變遷を叙する歴史にして天壤無窮なる帝室を戴き秀麗無比なる國土に養はれたる忠勇にして優美なる日本國民が上下三千年の治亂と漢學思想佛教思想等の感化とに由りて如何なる文學上の發達變遷を爲し、かは頗る興味ある問題にして又國民の知らざるべからざる所なり

一此書は著者が高等學校にありて日本文學史を教授する傍略文部省の國語科教科細目に據りて其大要を摘記し中等教育の教科書となさんとしたるものなり

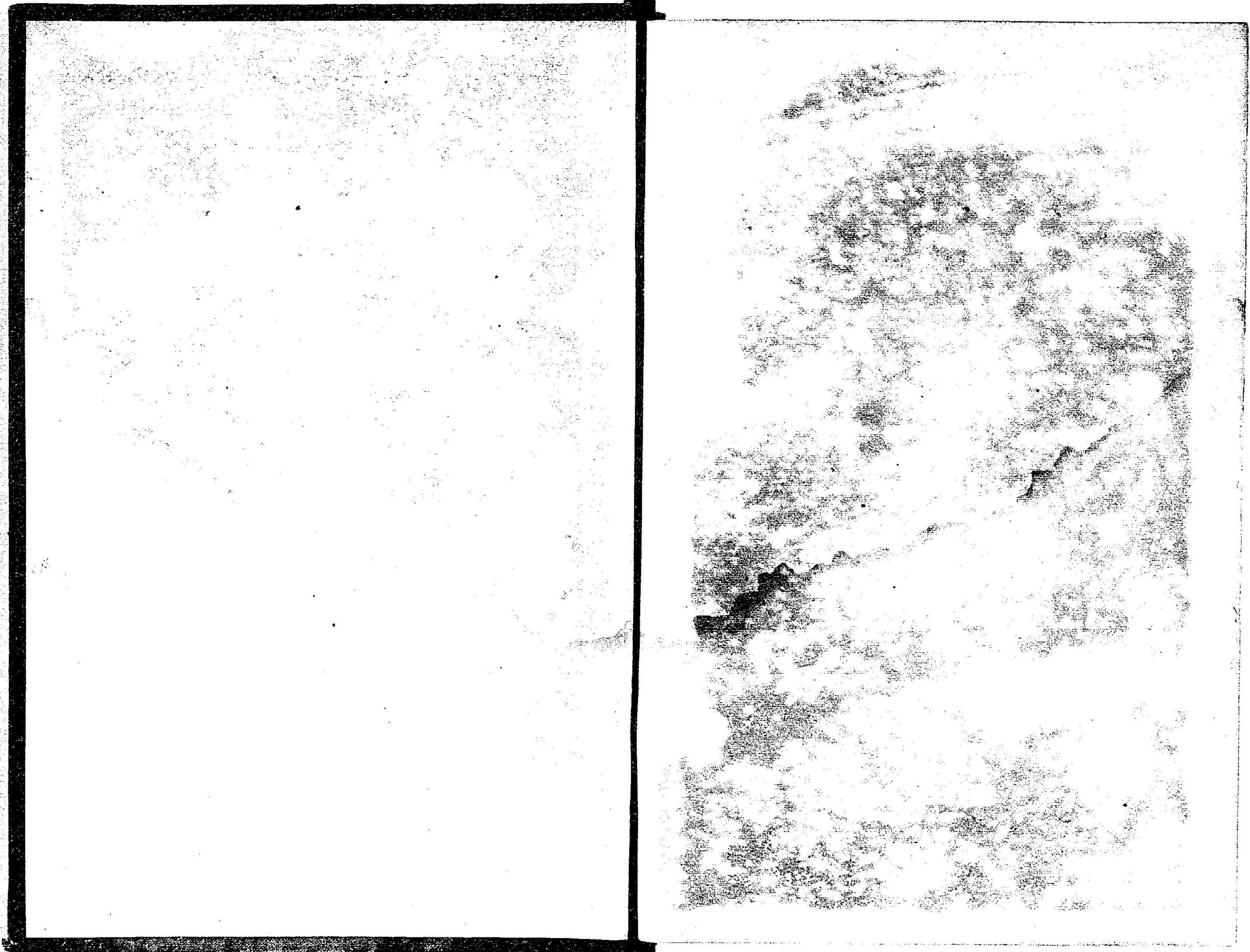
一從來此種の著書二三ありと雖も或は雅文雅歌等に類にして近古の時代文學に簡に或は文學全體の時代的變遷に専らにして其部分的變遷即ち各種の文體の變遷を遺却したるに似たり故に著者の最も注意せしは此點を補はんとするに在りき

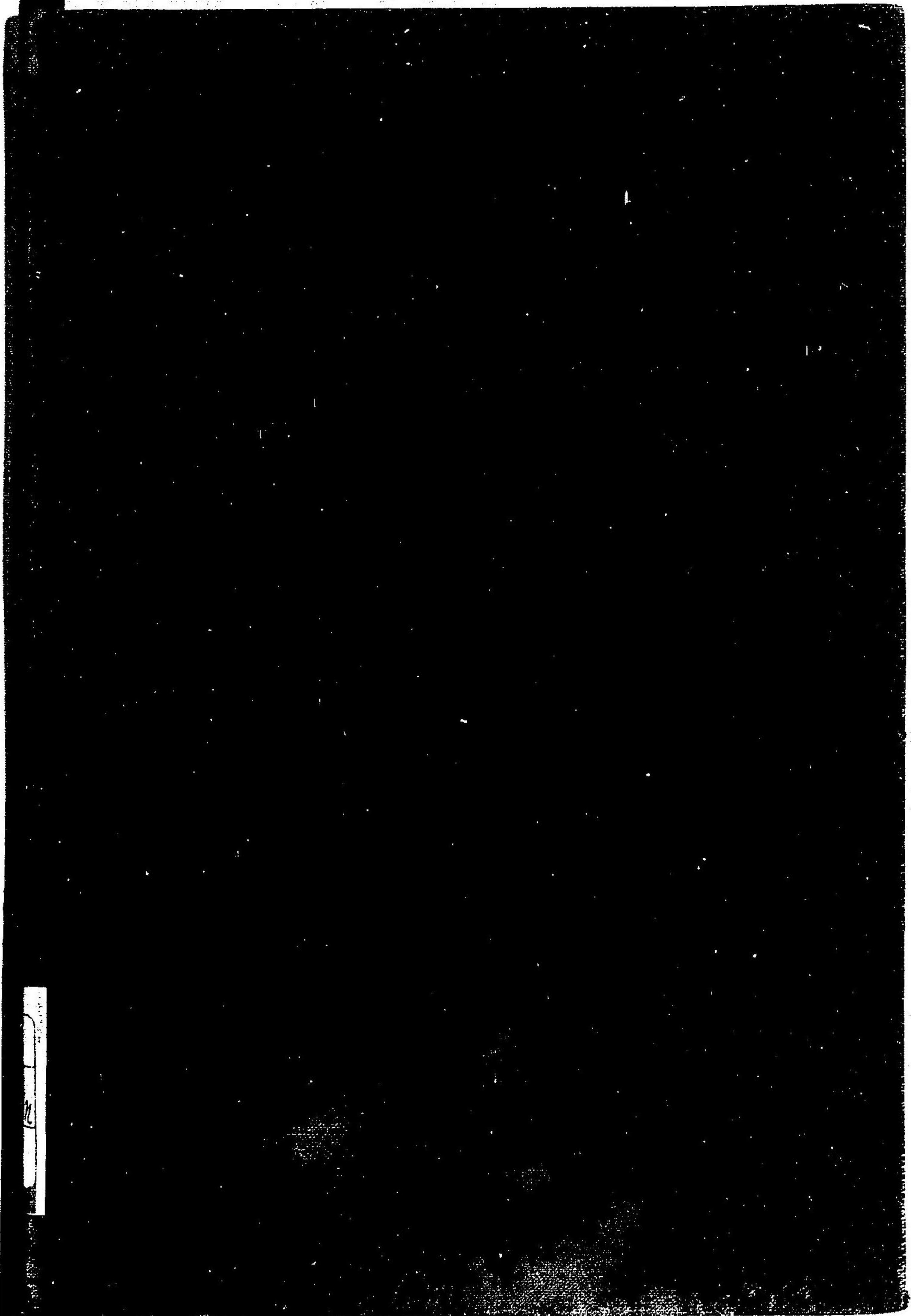
一此書は卷尾に文體の變遷及び時代文學の大要を表示して教師が書中の某項を省略し或は某節を敷衍することあるも全體の變遷を達觀せしむることに於て妨げなからんことを期す

發 行 所

東 京 市 神 田 區 南 甲 賀 町 八 番 地

## 內 外 出 版 協 會





12

078524-000-3

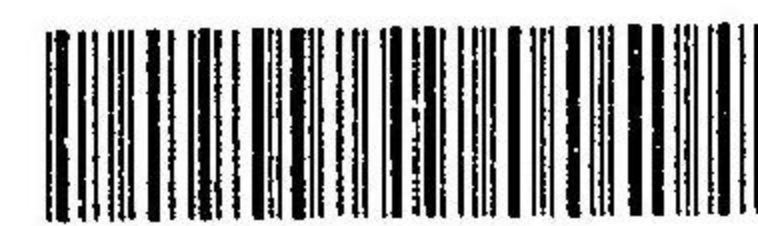
815-Su718n

日本小語典

杉 敏介/著

M33.1

DAC-2225



8  
S